

その思い出を語っている。

「入団したばかりの頃は、共同炊事の内容も悪く、自家で調理する材料も入手できず、村を出るときもろつた餓別の封を切り、満人から卵などを分けてもらい、老人・子供の口をなぐさめた。しかし七月に入ると、トマト・まくわ・西瓜などが豊富に取れ、八月にはは入るとすぐ橋いた小麦が収穫され、各世帯にも分けられたため、盆には、うどんやパンをつくって食べるようになった。うちは働き手が多く、それだけ配分が多く、働くのが楽しみであった。」

（つづく）
へ住所 南海郡本庄村大字宇津々

随想

浦江の漁師と焼酎

会員 西 元 由 雄

四月一日から始まる天草の採取は、一番草・ニ番草と続くが、強い日射しを裸身に受けて、重いジエリンに二十尋もあるコギ縄（麻製）で、海底の岩についている天草をかきとる。縄を右手でこぎ、左手で縄を時々引きながら、一日何百回となく投げ入れ、引上げする作業はまことに重労働で、午後になると手も足も痛くなり、疲労しきって膝を潜いで帰港する。

また、旧盆前から操業する棒受網は、上用の直射日光の下で行なう。この頃は天草も少なく、小鯖の小さな群にまじわされる。何十回も網入れするので、相当漁獲があっただろうと船底をみると、大部分が小鯖に使われ、

晩のおかずにする程度しか残っていない。

このほか、イカ・エソの釣漁にしては、午前四時頃から起き出て出漁し、寒風を受け、手を冷たい汐水にぬらしながらの仕事、しかも細い釣糸で指の節々を傷つけ、血をにじませ、ヒビ・アカギレをつくった。

このように苦勞する漁師の疲労をいやし、明日の活動力を生んでくれる活力剤は、晩酌の焼酎一合であった。

漁師と焼酎は、切り離せない関係で結びついていて、大漁の時は祝いの酒、不漁の折は慰めの酒である。大漁の晩は甘い酒となり、不漁の時は慰めの酒として、一人でちびりちびり、又は親と子、兄弟で盃を交し合う。

浦江町の漁業の花形で、所登済の大部分がまかなっていた棒受網漁と、焼酎との関係は特に深いものであった。大漁の晩には網元に集まり、獲れた魚を早速つくり（刺身）にして肴とし、大漁の次第を大声で語り合ひながら大いに飲む。この折には、盆・正月・大祭り、其他慶弔行事のほかにはお暇にかかれぬ銀飯も、腹一杯詰めこんだ上、お土産の大きな握飯をかかえ、千鳥足で家に帰ったものである。

しかし不漁が続いた夜は、網干場の小石原の上に荒らしろを敷き、十二、三人が車座になって、一升の焼酎を湯呑に分け合ってちびりちびりとやりながら、不漁について語り合う。魚群の状況、漁場の選定、風や潮の流れに至るまで、夜の更けるまで話し合うが、焼酎を飲まない者や若い衆は、早々に引きあげて帰る。

こんな晩は、一番気の毒で可哀想なのは若年者である。屋号入りのブラブラ提灯をさし上げて、電燈のない暗がり的一座をかすかに照す。そしてようやく一同が帰ると、その後片付けて帰るのであるが、先輩の話を聞くだけで、

茶言も出来ないで、早く終るのをジッとがまんして待つ始末である。

その時代は焼酎も一升ビンでなく、一斗五升入りの甕である。ダイヤ印のものが多く、主として宇和島方面から船便で来た。そのため焼酎専門の運搬船があり、その中に鷹丸というのがあったのを覚えていた。

酒屋では熊谷精一さん、高橋茂さんが大店であつたが、その外にも小売店が五六店あつて、毎月夕方にすると、小瓶を持つた主婦や子供がよくそんな店に出入りした。一合買いが多かったからである。今の蒲江農協の前の浜辺には、空の焼酎甕が山のように積まれていて、飲まれた焼酎の量が驚かされた。

漁獲は年中多かつたが、漁法の未熟と、加工技術のまづさ、冷蔵方法の不充分などで、漁師の収入は少なく、金や暮には、網元から米や現金を前借りしていた。そんなことでありながらも、漁師は焼酎をよく飲んでいた。

蒲江では船の進水式や家屋の落成祝いなどにはお神酒が出されたり、また氏神の祭りにもあつたので、一杯の焼酎にありつくために、忙しい山や畑の仕事に行つていても、その時間には段々畑をかけおりにきた。船祝いはふところの湯呑みや罐詰の空罐をしのばせて行く人もよく見かけていた。

こんなに漁師と焼酎の関係は深かつたが、経済成長の高度化や、椿受網の落ちこみ、地産網漁の不振等々で、昔の風物は影を失った。そして今のようにな高穀酒・ビール・洋酒が派手に飲まれる時代となつた。しかし、最近ではまた焼酎を愛用する人がぼつぽつふえているようであるが、昔のような漁師に密着した焼酎の時代は、再び来ないのではあるまいか。(佐所 南海郡那覇市蒲江町蒲江浦)

報告

佐伯史談会が、去る二月二十日文化会館で表彰を受けたことは六ページに書いた通りで、その際表彰状と共に、社会教育連絡協議会から佐伯信用金庫から次のような賞牌と賞金とを授けました。

- 一 おけびの賞 賞牌
- 一 副賞 金拾万円也

このような意外な受賞とまた下記のような多数の方々の賛助・ご支援をうけて、会員一同さうに励みをおぼえ、心を合わせて御佐伯の歴史と文化とをり組み、研修活動をつづけてまいりたいと存じます。

桜とまつりの便り

黒沢 東光庵の桜

歴史あるおがき桜、雨が多いせいかすでに八分咲き、二十一日の日曜が満開、黒沢ダム見学・富屋神社参拝、そして桜吹雪をうけて一杯、とそんな事をしつつはいかでしよう。

富屋神社の神幸祭が久々に行なわれますが、それは四月二十五日の由

三重内山観音 ご開帳

三月二十七日から四月十日まで、三國峠の桜が咲き、名物の桜やランも行なわれますので、古戦場めぐりもかねて四月四日(田)史談会も出かけます。(18ページ、36ページ参照)

へ参加申込及び今すぐバ

賛助寄付金拝受

(受入順)

- 金二〇〇〇〇 梅水幸吉氏(別府)
- 金三〇〇〇〇 西井雄氏(青山)
- 金二〇〇〇 田原貞雄氏(高野)
- 金二〇〇〇 田大鶴マツ子氏(高野)
- 金五〇〇〇 田中井平一氏(北川)
- 金二〇〇〇 田森神祇陽氏(佐伯)
- 金七五〇 田中 晃氏(田)
- 金三〇〇〇 田高野 忠氏(田)
- 金一〇〇〇 田小寺須摩子氏(田)
- 金二〇〇〇 田高橋 智氏(田)
- 金二〇〇〇 田石田靖一氏(東京)
- 金三〇〇〇 田御手洗一氏(東京)
- 金二〇〇〇 田秋月珍次氏(東京)
- 金二〇〇〇 田高原三郎氏(天分)
- 金六〇〇〇 田添次 龍氏(鶴岡)
- 金二〇〇〇 田中島フサ氏(東京)

佐伯春まつり

例年の通り四月三日四日五日

堅田城八幡社

三月、四日に

蒲江王子神社

祭礼行事

九市鹿富神社

祭礼行事

江丸市鹿神社

祭礼行事

龍護寺観音 ご開帳

四月十六日、十七日、十八日

直見 肘切神社

七九〇年大祭

四月十八日 日曜

このほか、花の便り、祭礼などおしらせ下さい。春を満喫するおため、つらと歩きましよう。